

平成 22 年 6 月 10 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19520146

研究課題名(和文) 古代礼楽思想と勅撰和歌集の和漢比較研究

研究課題名(英文) A Wakan Comparative Study of Ancient Chinese Thoughts on Manners and Music and an anthology of Waka (Japanese poems) selected and edited by the Japanese Emperors

研究代表者

渡邊 秀夫 (WATANABE HIDEO)

信州大学・人文学部・教授

研究者番号：90123083

研究成果の概要(和文)：平安から室町時代にかけて編まれた21代にわたる勅撰和歌集編纂を支える思想基盤には、中国を中心とする東アジア儒教文化圏に共通する古代儒教による「礼楽」思想が一貫して存在し、この礼楽思想の日本的展開、我が国固有の変容の成果として勅撰和歌集が編纂され続けたこと、さらに、この「礼楽」の思想的基盤(特に、中国古代音楽論)への認識を深めることが、勅撰和歌集研究に不可欠の要件であること等の諸点を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study has revealed the following three-fold argument:

(1) The Ancient Chinese Thoughts on Manners and Music, which is widespread in East Asian Confucianism Culture with China being the center, has been one of the backbone ideologies for the compilation of the 21 volumes of The Anthology of Waka selected and edited by the Japanese Emperors during the Heian and Muromachi era;

(2) This Ancient Chinese Thoughts on Manners and Music has evolved in Japan in its own way, and The Anthology had been continually compiled as the showcase of this Japanese-style development of the thoughts;

(3) and hence, a deep understanding of the foundations of this Ancient Thoughts on Manners and Music, especially understanding the Ancient Chinese Music, is indispensable to the studies on The Anthology of Waka.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：勅撰和歌集 礼楽思想 和漢比較文学

1. 研究開始当初の背景

『古今集』や『新古今集』などいくつかの

著名な作品に関しては、従来から少なからぬ個別的研究があるが、①「勅撰和歌集」を一連の国家的文化事業として、総合的・通時的にアプローチするものは極めて少なく(後藤重郎「勅撰和歌集序に関する一考察」、深津睦夫『中世勅撰和歌集史の研究』は、和歌文学プロパーによる希少な成果の一例)、かつ②和漢比較(日中韓比較)文学的な観点から研究したものは、その考察の重要性・必要性にも拘らず皆無に近い。また③現行の研究姿勢は、明治・近代以来、偏狭なナショナリズムや、旧弊な思想の産物としての誤解・曲解のうゑに蔑ろにされ、前近代の儒教的思想基盤を前提とした歴史・文化的な正当なアプローチがなされず、日本古代文学史研究上の大きな欠落となっている。結果として、④近代以来の和歌研究は、前近代の東アジア地域に共通する思想的な枠組み(古代儒教、取り分けて礼楽思想)に対する理解に乏しく、古典テキストの解釈がその根拠を曖昧にし、歴史を逸脱した恣意に流れやすいといった、根本的な欠陥があり、これを正すには、古典古代における古代儒教(礼楽思想)受容に関する復元的検証が不可欠である。

2. 研究の目的

本研究は、文学のみならず、歴史・思想・絵画・工芸・服飾などを含め、自然風物の表現、季節観や抒情の構造を始めとして、あらゆる美観や物の把握態度、行動様式に至るまで、広く日本文化の基層的な規範となって来た「勅撰和歌集」総体に関する和漢比較研究である。『古今和歌集』以来『新統古今和歌集』に至るまで21代にわたって勅撰和歌集が編まれ続けたことは、内外の文学史上稀有の、極めて注目すべき事象である。武家による鎌倉・室町政権下にあってもなお、それは、天皇権威のもとに政治的権力を保持するために不可欠であったし、広く文化総体のあり方を深く規定するものでもあった。この、天皇(院)の名の下に企画・遂行される国家的な事業である勅撰和歌集の編纂は、なにゆえに、またいかなる思想のもとに我が国固有の事象として成立し長きにわたって継続されえたのか、これらの諸点を明らかにすることを最終的な目的とする。具体的には、

①勅撰和歌集の編纂は、儒教文化の日本の変容の一つであって、しかもそれが我国特有の事象として生成されたこと、及び、②和歌文学のもつ力の根源的な深さを知らしめるとともに、古代日本の詩歌をめぐる文化の構造が明確化される。③さらに、これまで手薄であった総体としての「勅撰和歌集」の本質が明らかにされ、古代和歌文学史の根幹を成す事象への新たな知見が得られること。また、④権力を支える「権威」の問題を通じて歴史学や思想史にも大きなインパクトを与える

とともに、広く儒教文化圏における比較文化論的視野を大きく開くことになる等、以上の諸点を明らかにすることを目指す。

3. 研究の方法

本研究は、近来明確化されてきた和漢比較的視野——和文世界をその支盤となる漢文世界との動的・構造的な相互関係の中で共時的・通時的に分析評価する手法——の下、東アジア儒教文化圏の歴史的動向をふまえ、わが国固有の文学・文化現象である勅撰和歌集の継続的編纂の意義を問うことを通じ、日本的なるものの固有性を広く普遍的事象のなかに位置づけ、旧来の古典(和歌)文学研究に、学際的・総合的・比較論的な視界を拓こうとするものである。

(1)本研究を遂行するためには、古代社会を支える儒教的な思想・観念——特に、「礼(礼儀)」「楽(音楽)」思想の観点——を前提とするアプローチが必須要件となる。「礼楽」の思想そのものは、中国のものでありながら、しかも、中国本土にはこのような詩歌の勅撰は存在せず、より儒教的な考えが純粹培養された韓国にあっても、遂に継続的な勅撰詩歌集の編纂は生まれなかった。この最も日本的(国粹的)とみなされて来た文学事象を解明するために、視野を広く東アジアの儒教文化圏のなかに開き、和漢比較文学的な手法のもとに再検証しようとするところに、本研究の大きな特色がある。

(2)本研究はまた、日本的なるものをより大きな視野から捉え直し、根源的に再検証する試みでもある。古代日本の歴代の勅撰和歌集編纂の事象を、東アジアの儒教文化圏における政治と詩歌の関わりを明らかにしながら、その日本的展開・変容という観点から、日本古代の基盤的思想であった「礼楽」(儒教の統治概念)をベースに考察し、この「日本的なるもの」の固有性と普遍性を比較分析する点に創意がある。

このような観点を前提として、平安前期から室町期に至るまで、勅撰という形での和歌集の編纂が、何故かくも不断に継続されたのか、その理由を検証・解明するために、以下のような具体的な手法を採る。

①中国・韓国等の儒教文化圏における詩歌と「礼楽思想」をめぐる類似例の調査とその分析結果の比較対照を試み、日本古代に特異な本事象の思想的背景を明らかにする。また、これと並行して、②日本古代(平安～室町期)における礼楽思想の受容の様態を、和歌文学ジャンル以外の分野にも広げて調査分析するとともに、③十分な解説が為されていない各勅撰集に附属された一連の「序文」群——とりわけ、漢文体で書かれた「真名序」本文の調査・校訂及び正確な解説を徹底し、これを一貫する強固な思想の成果として、勅撰集

としての編集意図を明確化する。

4. 研究成果

○平成 19 年度 中国北京日本学研究センターを拠点とし講演・発表を行うとともに、中国国内における日本古典学研究者との研究交流を行った。①9月5日(水)、10時半から12時半まで、東北師範大学において、和漢比較研究の方法と課題と題して、大学院日本語学・文学専攻院生約20名を対象として講演、続いて、同浄月キャンパスに於いて、同日午後、13時から14時半まで、日本語科コース在学学生40名を対象として、「東アジアのなかの和歌(やまとうた)」と題する講演を行った。②9月7日(金)午後15時から17時まで、北京日本学研究センターに於いて、「和歌発生論と古代音楽論—『古今集』序を読む」と題し、礼楽思想と勅撰和歌集の関係についての講演発表を行い、日本古典専攻の中国研究者との共同討議を行った。又併せて、北京市内を中心として、中国国内に於ける中国古代音楽理論・礼楽関連の研究情報及び関係資料の調査・収集によって、最新の豊富な学術情報を得ることを通じ、当該研究テーマを大きく推進するとともに、これらの成果のもとに、今後の学生教育にも大きく寄与する一定の成果をあげることができた。③3月13日から3月16日まで、中国北京市の北京日本学研究センターに於いて、センター准教授張龍妹氏を中心とする北京周辺在住の中国人日本古典研究者と、科研課題に関わる研究交流を行い、併せて、センター在籍の博士・修士課程院生の研究指導をするるとともに、北京市内・北京大学に於いて資料収集及び情報交換を行い、所期の目的の一部を果たすことができた。

○平成 20 年度 ①勅撰集序の注釈的研究に関し、「古今和歌集序」の鎌倉以降近世に至る古注釈の解釈例の思想的背景の検討を行うとともに、中・近世における礼楽思想の変容過程を検証する一環として、熊沢蕃山『源氏外伝』における礼楽思想の分析を行った。また、②平安期の時令思想を和漢比較的观点から対照するために『大唐開元礼』の受容及び古代文学との相関を検討した。③『源氏物語』と音楽との関係を論じた研究史を総覧し、それらが専ら楽器・奏法論等、もっぱら「楽志」的考察に偏り、「楽論」的、思想論的、即ち、中国古代音楽論的観点からのアプローチの極めて希薄なことを確認するとともに、礼楽論的角度から『源氏物語』中のさまざまな表現論との摺り合わせを試み、有効な指針を得た。④真名・仮名序の文体的相互補完性を測るため、あらためて平安期の和漢比較対照的な表現世界における「国風」なるものの検証を行った。その成果の一部が「平安時代の国文学と漢文学」(『歴史評論』702号・歴

史科学協議会)である。⑤もの・自然景物と感情との詩学的(東洋音楽論的)関係を『源氏物語』の自然描写の基底にある思想・イデオロギーの共通性のなかに検証した。その一部は、「平安時代の和歌文学と自然・四季—『源氏物語』の自然描写の基底—」(『源氏物語』一千年記念国際会議・ワルシャワ大学図書館・2008年10月21日及び同24日Manghaセンター・クラクフ市)で講演発表した。

○平成 21 年度 勅撰和歌二十一代集所収真名序の注釈的研究に関しては、①勅撰集序(真名・仮名両序)の用語・語彙の分類・整理を進めつつ、王朝漢語との位相差についての検証方法を模索した。②既存の古今集真名序の注釈史上の問題点を析出する一方、第一次本文注釈稿の書き下し補正及び・口語訳を進めたがなお、成稿にはさまざまな問題点を残す。③さらに、『礼記正義』序をベースとして、六朝詩論類を含めた、「太一」「氣」より「性情(心・志)」に至る、天一地一人にわたる宇宙観/天人感応観のもと、外物に触れて感情が生起する(詩歌発生)の原理構造をチャート化し、古代詩歌論を支える思想的な枠組みの指定を試みた。④なおまた、東アジアに向けた和漢比較的な視野を開くため、古代音楽論(礼楽思想)のものと詩歌発生論に関し、聞一多「歌と詩」論文の翻訳作業を進めほぼ草稿をまとめた。⑤「日本古典文学における和漢比較研究」と題する招待講演(2009.7.24・北京日本学研究センター)を行い、日本の和漢比較研究の手法上の問題点等について中国人研究者・院生との討議を深めた。⑥中国唐代における文学動向と平安朝におけるそれとの比較対照研究の一環として、公開シンポジウム「唐代伝奇と物語文学」(2009.9.26・平成21年度和漢比較文学学会大会公開シンポジウム)のパネラーの一人として「漢文伝と唐代伝奇・物語」と題する報告を行い、和漢比較的研究の手法的可能性を広げた(同題の論文は学会誌『和漢比較文学』48号に掲載)。⑦「古今集と漢文世界」(2009.10.16・京都女子大)の公開講演のほか、⑧国際シンポジウム「東アジアの『今昔物語集』と<予言文学>」(2010年3月19~21・北京日本学研究センター主催)に参加し、日・中・韓・越4カ国の日本学研究者の討議を通じ、漢字(儒教)文化圏における文学研究の在り方に関する知見を得るとともに、漢喃研究院スタッフとの研究交流を行う一方、北京市内において、礼楽及び勅撰和歌集関連資料の調査・収集、研究交流を行った。

以上の諸調査研究活動を通じ、

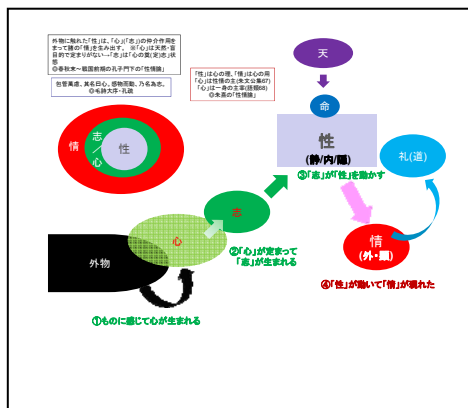
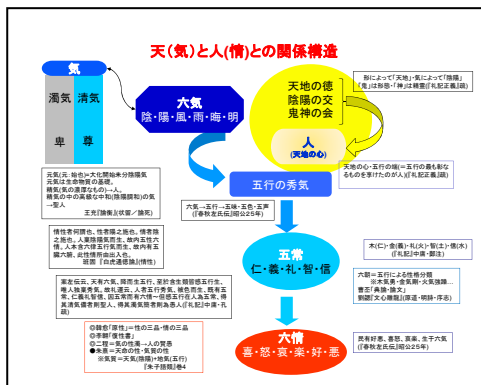
(1)主な成果としては、①勅撰和歌集の序(とりわけて真名序)の注釈的研究における精度をあげたこと。②勅撰和歌集編纂を支える思想的背景に「礼楽」思想が一貫して存在する

こと。③その思想的基盤は、東アジア儒教文化圏に共同のものでありつつ、その日本の変容が確認されること。また、③中国的な思想の受容によるものでありながら、本家中国では存在せず、古代日本固有のものとして継続されたのは、民謡・歌謡を出自とする歌の本性が、その根幹をなす「楽府思想」と共鳴しえたことにあるとの仮説を相相当程度まで確認しえたこと等により、今後の研究への指針・方向性がさらに明確化されたことなどである。

(2)得られた成果の国内外における位置づけとインパクトとしては、こうした和漢比較研究の視角は、国内外を問わず、また所属の国文学界の枠を超え、他分野・他学会への関心をも高め、その有効性が認められるような趨勢にあり(中国・東欧圏での国際学会での招待講演を始め、歴史学・古代文学会等への寄稿、講演依頼等)、さらに学際的・比較論的研究の広がりが期待できる。

(3)今後の展望としては、①古代中国における春秋・戦国期から宋・明頃までの礼楽思想における「性情論」の展開と本質を整理し、これを指針とし、これらを受容した我が国の平安期から近世期までの文化事象(とりわけて古典注釈)の分析を行い、両者の比較対照(含む受容論)研究をさらに推進し、より通時的考察を強化すること、さらには、②中国・韓国に加え、ベトナム等東アジア漢文化圏へと視野を広げることを通じ、我が国の勅撰和歌集編纂という文化事象の固有性と普遍性を不断に追求することで、より大きな成果が期待しうる。

[性情論の概念図]



5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 2 件)

- 1、渡邊秀夫「漢文伝と唐代伝奇・物語—『続浦嶋子伝記』をめぐって—」(『和漢比較文学』48号, pp19-36, 和漢比較文学会, 2010. 2, 査読有)
- 2、渡邊秀夫「平安時代の国文学と漢文学」(『歴史評論』702号, pp20-33, 歴史科学協議会, 2008. 10, 査読有)

[学会発表] (計 4 件)

- 1、渡邊秀夫「唐代伝奇と物語文学」(平成21年度和漢比較文学会大会公開シンポジウム, 2009. 9. 26, 國學院大学, 東京)
- 2、渡邊秀夫「日本古典文学における和漢比較研究」, 2009年度漢学ワークショップ招待講演, 2009. 7. 24, 北京日本学研究中心, 北京
- 3、渡邊秀夫「平安時代の和歌文学と自然・四季—『源氏物語』の自然描写の基底—」, 『源氏物語』一千年記念国際会議招待講演, ワルシャワ大学図書館, 2008. 10. 21 及びクラクフ市Ma n g g h aセンター, 同 10. 24, ワルシャワ, クラクフ
- 4、渡邊秀夫「和歌発生論と古代音楽論—『古今集』序を読む」北京日本学研究中心, 2007. 9. 7, 招待講演・北京)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡邊 秀夫 (WATANABE HIDEO)
信州大学・人文学部・教授
研究者番号：90123083